モノレール

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モノレール

【Ｎコード】
Ｎ７１５８Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
見知らぬ街へ行く男女二人。
電車の中で、互いに時を過ごす。
彼らはそれぞれ何を思うのか。

※サイト、ｄノベ転載

青い空が眩しい空の下、街の中をモノレールが走っていた。
人が大勢乗り合わせ、目的地へ向かう。
その中に、黙って寄り添う一組の男女がいた。
彼らはただ窓の向こうの街並みを見ていた。

そして、夜の帳が海を染める中、モノレールはひたすら海を越えた隣の町へ走っていた。
人はまばらであった。
その中にはまだ先ほどの一組の男女がいた。

「ねぇ、もしあたしがあなたの前からいなくなったらどうする？」
女性が男性の肩に寄りかかりながら、目線は前を見たまま、静かに問いかける。
男性は無表情のまま、しばらくしてから言葉を発した。

「……なんでそんなこと言うの？」
顔の表情は変わらなかったが、口調はとても嫌なことを言われたように、不快な調子であった。
男性のその様子を受けて、女性は声のトーンを落とす。

「だって、いつあたしがいなくなるかわからないから」
しばらくの沈黙の後、男性は口を開いた。

「……そうやって言って、君は僕に何と言ってほしいんだい？」
女性は目をつむった。

「あたしもわからない。でも、あたしは言いたいことがいっぱいあるの」
男性は口の端を持ち上げて、かすかに微笑みをうかべた。
目線は相変わらずお互いに合わせない。

「じゃあ、僕に聞くんじゃなくて、君が言いたいことを言ってよ」
女性も柔らかな笑みを浮かべる。

「そうね。あなたを愛してる」

男性は言葉を噛みしめるように一呼吸置いて、言った。
「わかってるよ」
「言わなきゃダメなのよ。いくらでも言わせて。あたしがもしあなたの前からいなくなっても後悔しないように」
女性の笑みは、どことなく切なげに見えた。
声も、泣きそうに震えている。
その女性の言葉を受けて、男性の顔から笑みが消えた。

「勝手に君が先に消えるなんて決めつけないでよ。僕が先に消えるかもしれないだろう？」
どことなく、口調は怒りを含んでいた。
女性は男性の腕をそっと手でつかんだ。
切なげな笑みはそのままに。

「それはそれで嫌。あなたには私のことを覚えていてほしいもの。いつか私がいなくなっても、あなたは私を忘れないでいてほしいの」
男性は鼻から空気を小さく出し、こう言った。
「わかったよ。もう寝た方がいい。目が覚める頃には街の中に入っていると思うよ」

「うん……」

女性はもう消えるような声で返事をし、そのまま静かな息が聞こえてきた。

男性は窓の向こうを静かに見ていた。

その少し右側には、冷たく銀色に澄んだ月が見えた。

徐々に空が白み始め、眩しい朝日の光が窓から入り込む。

女性が目を覚ますと、隣の男性は寝入っていた。

もうモノレールは日の光を反射して、銀色に輝く街の中を走っていた。

女性は男性の顔を眩しげに少しの間眺めた後、窓に目線を移し、そのままモノレールに揺られていた。

モノレールは、空を映す街の彼方に消えていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7158t/

モノレール

2011年6月7日04時29分発行